

日本中国語学会第1回関東支部拡大例会

2007年3月17日(土)

明治大学 駿河台キャンパス リバティタワー13階

JR 御茶ノ水駅3分、地下鉄新御茶ノ水駅・小川町駅5分、神保町駅8分

<http://www.meiji.ac.jp/campus/suruga.html>

早春の候、会員の皆さまには益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。さて、このたび第1回関東支部拡大例会を下記のとおり開催することになりました。12名の会員の研究発表に加え、若手会員のグループによるワークショップも予定されております。年度末のお忙しい時期ではございますが、皆さまどうぞふるってご参加ください。

2007年3月17日(土)

09:30-09:40 開会式 リバティタワー13階 1133教室

開催校挨拶

明治大学 守屋 宏則

開会の辞

関東支部代表

中央大学

佐藤富士雄

	1133教室	1134教室
09:40-10:20	① 柴田奈津美(東京大学・院)	③ 張 桂珠(筑波大学・院)
10:20-11:00	② 白銀 志栄(神田外語大学) 司会:三宅登之(東京外国語大学)	④ 原瀬 隆司(大東文化大学) 司会:遠藤雅裕(中央大学)
11:00-11:10	休憩	
11:10-11:50	⑤ 佐藤富士雄(中央大学)	⑦ 宮本 大輔(神奈川大学・院)
11:50-12:30	⑥ 三野 園子(明海大学・院) 司会:荒川清秀(愛知大学)	⑧ 竹中佐英子(目白大学) 司会:劉 勳寧(筑波大学)
12:30-13:30	昼食 休憩	
13:30-14:10	⑨ 高橋弥守彦(大東文化大学)	⑪ 砂岡和子(早大)・詹 衛東(北京大)
14:10-14:50	⑩ 町田 茂(山梨大学) 司会:守屋宏則(明治大学)	⑫ 小方 伴子(首都大学東京) 司会:山崎直樹(大阪外国語大学)
14:50-15:00	休憩	
15:00-17:00	ワークショップ 『中国語辞書—これまでとこれから』 発表者:三宅 登之(東京外国語大学) 中西 千香(愛知大学・院) 山崎 直樹(大阪外国語大学) 遠藤 雅裕(中央大学) コメンテーター:荒川 清秀(愛知大学) 依藤 醇(東京外国語大学) 司会:小野 秀樹(首都大学東京)	

(発表要旨)

「“明白”と“弄明白”、“丢”と“弄丢”の相違について」

柴田 奈津美(東京大学・院)

結果構文に出現するダミー動詞(D)には“弄”“搞”“闹”の3つがある。これまで“弄脏”“搞坏”など結果構文の第一要素として用いられるDについては、“脏”“坏”など目的語を取ることができない自動詞或いは形容詞を、目的語を取ることができる他動詞へと転換させ、「～させる」という使役義を獲得させる働きがあることが指摘されてきた。しかし、“弄懂”の“懂”、“弄开”の“开”、“弄丢”の“丢”など、単独で用いられても目的語を取ることができる動詞もDの補語として現れることがある。本発表では、“懂”“开”“丢”などが単独で構成する述語とDの結果補語として構成する“弄懂”“弄开”“弄丢”のような「DR」型述語の違いを明らかにする。前者と後者の間には語彙概念構造上に違いがあり、また後者は前者に比べて結果に対する意図性や責任性が強いことを主張する。

「“(一)边A(一)边B”のAとBについて」

白銀 志栄(神田外語大学)

“(一)边A(一)边B”は「A(し)ながらB(する)」ことを表し、日本人学習者にとっては、さほど難しい文型ではない様に思われる。AとBの表す意味、AとBの語順を決める要因などについては既に何篇かの先行研究があるが、まだ分析が浅いため、単純なルールを見出すに至っていない状況である。本発表は調査の結果、Aには1. 急いでやるべき動作・行為(文意が已然を表す場合は、先に発生した動作・行為)、2. 文脈、3. シテがどういう体勢でいるか、4. 付帯状況、を表すものが来ると認め、この形式と「AながらB」との統語上の相違点を明らかにしようとするものである。

「試論台湾四縣客家話與判斷有關的情態詞」

張 桂珠(筑波大学・院)

本論文主要論析台湾四縣客家話的“有”字句, 並針對出現于動詞句前之“有”所表示的語法意義提出一個完整的說明和論證。首先觀察以下例句:

- (1) 你*(有)食飯無?
- (2) ngai*(有)食飯。¹⁾
- (3) ngai(有)去過美國, 你哪?
- (4)*佢有食一碗飯, 就食唔落哩。

目前學界對動詞句前之“有”所表示的語義有表示過去標誌, 完成體貌, 情態動詞表示強調或已然貌等論述。本文指出“有”所表示的是實現(realis)的語法意義。“有”於句中為必須(如(1)或(2)), 可有可無(如(3))或不可出現(如(4))等條件, 與實現的語義有關。本文並認為“有”用於疑問句時為確認舊信息, 而用於陳述句時則為確認新信息的功能。

1) ngai = 第一人稱代詞

「蘇州語の動賓構造 実験音声学からの分析をふまえて」

原瀬 隆司(大東文化大学)

音声言語としての蘇州語を対象にし、音声分析機器を利用した研究の成果の一端を公にしたい。蘇州語音声には、トーンとイントネーションの要素からなる複雑な「連続変調」の現象がある。トーンは単語に付与されている性質であり、イントネーションは文のもつ性質である。今回の報告では、いくつかの単語からなる動賓構造を例にとる。声調交替がどのように実現しているかを、実験機器をもちこんでの蘇州での臨地調査をふまえて、あわせて報告者の聴覚印象との合致・不合致を検討する。呉語の代表方言たる蘇州語の統語構造のあらたな認識を示してみたい。

「反復疑問文の使用状況—前置詞反復型と述語反復型」

佐藤 富士雄（中央大学）

介詞を反復した反復疑問文が成立するか否かについて、望月八十吉・高維先 1970 は、否定的（你和他説＋你不和他説→你和他説不和他説？ *你和不和他説？）、黄正徳 1988 は、肯定的（你从不从这里出去？你到底把不把功课做完？你跟不跟他说话？）、呉振国 1994 は、半肯定的（你在不在家里吃饭？你从不从北京走？作れるが規範性に疑問）な見解を示している。

また、伝統タイプの反復疑問文“你看见他了没有？”に対し、“你看没看见他？”“你有没有看见他？”のような、述語（後から追加した形式述語を含めて）を反復する新興タイプが分布を拡大している形跡もある。

本発表では、最近中国の大学の学生を対象に実施した調査結果を基に、これらの文型が若い世代にどの程度受容されているのかを、出身地域別に数値化した形で示してみたい。

「中国語朗読に於る停顿について」

三野 園子（明海大学・院）

中国語母語話者が中国語の朗読文¹⁾を朗読する時、どの箇所停顿し、その停顿の特徴は何かを調べた。次に日本人中国語学習者²⁾の停顿についても同様の調査を実施し、最後に両者の比較を行った。

その結果、中国語母語話者の停顿数は標点符号数に近く、停顿位置は全員の一致率が高く、それらは標点符号の位置と重なることが多いということが検証された。一方、日本人中国語学習者は中国語母語話者に比べ停顿数が多く、停顿位置が区々であり、全員が同じ箇所で停顿する比率が低いことがわかった。

また、フォローアップインタビュー及びアンケートの回答により、中国語母語話者のほぼ全員が初等教育時、“語文”の授業中に標点符号と停顿長の関係を習得していることがわかった。中国語母語話者には中国語朗読時の停顿に朗読教育の影響が見られるのではないかと思われる。

1) 本論では朗読文を物語に限定した。 2) 本論では HSK5 級以上の者を対象とした。

「中国人大学生の言語評価 北京・天津・上海・杭州の調査に基づいて」

宮本 大輔（神奈川大学・院）

本発表は、中国人大学生の言語評価に関する研究である。調査対象地は北京・天津・上海・杭州の4都市、対象方言は普通話と10の方言—上海語、江西語、湖南語、福建語、広東語、安徽語、四川語、山東語、杭州語、蘇州語である。その統計結果を通して、以下の傾向を得ることができた。(1)それぞれの方言に対する評価は、南北で一致を見せるものもあれば、全く異なるものもある。(2)言語評価には経済的威信の影響を色濃く受けるものと文化的威信の影響を色濃く受けるもの、そして心理的要因の影響を色濃く受けるものが存在する。(3)普通話に対する評価には4地点において共通するものがある。(4)ある方言に対する評価では、自己評価と他者評価との間に大きな差が見られる。

「中国語学研究と中国語教育研究と中国語教育」

竹中 佐英子（目白大学）

日本における中国語教育研究の方法は主に2つある。1つはある特定の文法事項の教育法を検討したり、学習者の誤用が成立しない理由を解明するものである。この方法で得られた成果は教材執筆や教育現場に活かせるが、論文の紙面のほとんどが語法、語彙研究に費やされ、教育研究よりむしろ中国語学研究への貢献度が高い。もう1つは自身の指導法の紹介である。この種の論文は他の教員に教育現場での指導のヒントを与えてくれるが、執筆方法によっては科学的研究ではなく、自身の体験報告に終わる可能性もある。

陸俟明氏が対外漢語教学を「語法研究の試金石」と表現して以来、対外漢語教学研究は語学研究の下位分類からの脱却を試み、独立した地位を確立させ、科学的な研究へと発展してきた。この発表で

は、対外漢語教学研究の成立過程、成果から、中国語学研究と中国語教育研究の違い、中国語教育と中国語教育研究の違いを考察したい。

「連語論からみる“上来”と空間名詞との関係について」

高橋 弥守彦(大東文化大学)

“上来”と空間名詞は、一般に「“上”+空間名詞+“来”」または「動詞+“上”+空間名詞+“来”」の構造で、次のような文を作る。

- (1) 几个小青年说着竟然上前来摸他的口袋。(『人民中国』88-6-93)
- (2) 我刚才上楼去了。(『八百詞』p.302)
- (3) 我看见一个女同志跳上台来。(《趋向补语通释》p.117)
- (4) 他合了一会儿眼，才慢慢走上楼去。(《趋向补语通释》p.127)

本発表では連語論の立場から、上掲の文中に現れる“上”の品詞となぜ空間名詞は“上”の後に用いられるのかと空間名詞の種類などについて言及する。

「現代中国語数量詞の非計数機能」

町田 茂(山梨大学)

数量詞の基本機能は計数だと考えられているが、計数の必要性がほとんど無い場合にも数量詞が使われる。こうした数量詞の機能について、従来、「不定の標識」「個体化」「有界化」「賓語の標識」などと説明されてきた。本発表は数量詞は多機能であるとの観点から、現代中国語数量詞、特に「一个」の意味機能の分類を試みる。

現代中国語では「数量詞+名詞」という語順が守られているが、各意味機能の派生過程を参照しつつ、数量詞に、「同類事物中の一個体にアクセスする」「一個体を具体的に描写する」という二つの機能を認めることを提案したい。前者は「个」以外の量詞にも適応され、しかも不定冠詞に類似する面があるが、後者は「个」独自の機能である。両機能に共通する「具体化」は、中国語における一種の文法範疇と言えるのかも知れない。

「言語コーパス利用の中国語電子補語辞典編纂とその課題」

砂岡 和子(早稲田大学)・詹 衛東(北京大学)

中国語動詞補語はその定義や用法自体が難しいばかりか、補語の使用条件について理屈にあった説明をするテキストが少なく、習得のネックとなっている。本報告では、北京大学汉语语言学研究中心(CCL)と同計算語言所(ICL)の言語コーパスを利用して現在構築中の、中国語動詞補語電子辞典の編集と、電子辞書の記述作業で明らかになった動詞補語の語義特性について報告する。

本電子辞書は結果補語を主に、一部の方向補語、可能補語、程度補語について、生の言語素材から学習者用にリライトした例文を収録し、実例に即し補語の語義特性を記述する。述部動詞(形容詞を含む)はHSK、既刊中国語補語辞典、ICLおよびCCLの頻度情報を参照し、述部と補語の組み合わせは作業者の語感とコーパスやインターネット言語資源を参照して選定した。個々の出現頻度情報の提示と補語の語義特性の記述に加え、検索の自在さは、従来の補語辞典に比べ、中国語動詞補語を活用するさいの有力な学習情報になると期待できる。

「語法資料としての『国語』韋昭注 版本に関する諸問題」

小方 伴子(首都大学東京)

上古から中古に至る時期の語法資料としては漢訳仏典、正史、注釈類などが挙げられる。そのうち注釈類に関しては、書面語である、簡略化など注釈特有の書法がある、といった問題点が指摘されている。しかし一方で、著者と成立年代がある程度限定される、本文との比較検討が可能であるといった利点もあり、趙岐、鄭玄、何休などの注釈は、扱い方に注意を払えば、翻訳文献である漢

訳仏典とは異なる資料的価値があると考えられる。呉の韋昭による『国語』の注釈にも、語法資料としての価値が期待される。しかしテキストの信頼性という点からいうと、検討を要する問題が少なくない。特に、版本をめぐる問題が大きく横たわる。代表的な先行研究には、清朝人の題跋や四庫提要の記述を等閑にした紹介が少なくない。本発表の目的は、『国語』の諸版本の伝来および特徴を、清朝人の題跋や四庫提要を丁寧に読み解くことにより、明らかにすることにある。

ワークショップ『中国語辞書　これまでとこれから』

1. 動詞の用例と名詞の用例　辞書での品詞表示と提示すべき用例の関係について

三宅 登之(東京外国語大学)

三宅 2005 は辞書における動詞と名詞の品詞表示の分布と兼類の理論的解釈を試みたが、本研究では特に、動詞と名詞にどのような用例を掲載するのが適切かという問題について検討する。本研究はいわば山崎 2005 のコンセプトを活用し、三宅 2005 を発展させたものとして位置づけられる。

サンプルとして、“調査”“研究”などのような動詞と名詞の兼類として扱われることの多い語の中から、用例の豊富なものを中心に取り上げる。

まず近年日本で出版された辞書における記述から、“研究自然科学”のように目的語を伴う動詞としての典型例、数量詞の修飾を受ける名詞的な用例というように、いくつかの用例パターンを抽出する。次にその辞書の品詞表示が用例に適切に対応しているかどうかについて分析を加え、問題となる用例提示の例を批判的に検討することを通じて、学習者にとって適切な用例とは何かについて建設的な提案を行いたい。

2. 辞書における動詞項目に如何なる前置詞情報を盛り込むべきか

中西 千香(愛知大学・院)

本報告は、現代中国語における動詞と前置詞の間に存在するコロケーションが現行辞書の中でどのように記述されているかその現状を概観し、また、どのように記述すべきかについて、中国語教学の観点から検討しようとするものである。

一般に前置詞の選択は、(1)動詞との結びつき(給～介绍, 跟～联系, 为～服务), (2)目的語との関係(上下関係など, 例: 向 / 给～介绍), (3)動詞の文体的特徴などの条件が絡み合っていると考えられる。したがって、辞書の記述にそれが反映されていれば、非母語話者である我々にとって非常に有益である。本報告では、前置詞を用いることの多い動詞をいくつか選び、各辞書の記述を比較し、使用頻度や複数の前置詞を用いる場合の相違点について述べ、動詞に関わる前置詞の記述を辞書でどう行うべきかについて問題提起をしたい。

3. 学習者にとって有益な用例を漏らさないためのフレームを考える

山崎 直樹(大阪外国語大学)

ウェブ上で“认识”の用例を検索すると、“经朋友介绍, 蔡金柱认识了相关领导。”のような構造の文を多数得ることができる。しかし、既存の辞書では、この種の用例は見られない。つまり、学習者にとり利用価値のある有益な構文を提示しそこなっているということである。しかし、これまでに構築されてきた格フレーム(動詞と共起する項との組み合わせを公式化したもの)では、このような用例を捉えきれないかもしれない。

このような漏れを防ぐためには、ある行為(例えば「认识/知り合う」)を構成するさまざま要素(行為の参与者, 行為成立の前提, 行為の結果が含意する状態……)を図式化した「フレーム(知識の総体)」を規定し、それにより漏れている事項の有無をチェックする必要がある。本報告では、この観点から、Fillmore and Atkins 1992 などで提案されているフレーム意味論を援用して語彙を記述することを試みる。

4. 中国語辞書における多義語の記述について

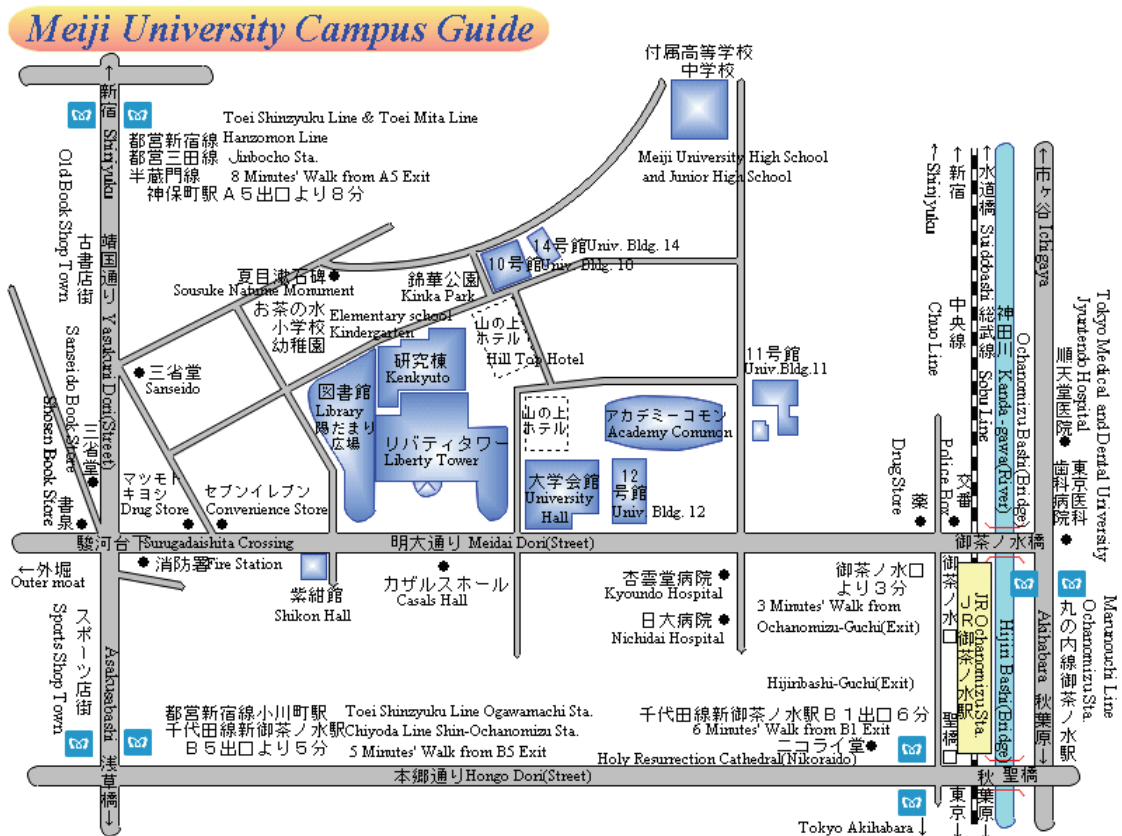
遠藤 雅裕 (中央大学)

語義の記述は辞書の中核をなす。しかしながら、中国語辞書については、その内容については深い議論がなされていない。本報告では、遠藤 2005 を踏まえ、中国語辞書における常用多義語の語義項目の記述、(1)語義項目の配列と(2)語義項目数について議論する。

語義の配列方法には、(1)頻度順、(2)年代順(語義派生順)、(3)意味関係順の3通りがある。本報告では、(3)意味関係順が当該見出し語の語義全体を最も効率よく把握できるものと考え、具体的事例を挙げ、各辞書の記述を検討しながら、その理由を説明する。例えば「講談社2版」で採用された「派生ツリー」の妥当性を検証する。

語義項目数については、過度の細分化には反対する立場を採る。というのは、固定的なコロケーションにのみ現れるような語義を一項目とするのは不経済だからである。

ケーススタディとして、「把」「叫」などの常用多義語について、それぞれの多義の体系を提示する。次に各辞書の記述を整理の上提示。「現漢」も対照させる。その上で、各辞書の語義配列などの特色および問題点などを指摘し、個別の語について語義項目配列案を提示する。



例会担当校募集 / 来年度担当のご希望がありましたら、3月末日までにご連絡ください。

〒305-8571 つくば市天王台 1-1-1
筑波大学人文社会科学部 佐々木勲人
ysasaki@sakura.cc.tsukuba.ac.jp